

Nico Keilman, Anton Kuijsten and Ad Vossen(eds.)
Modelling Household Formation and Dissolution

Clarendon Press, Oxford, 1988, 298pp.

本書はヨーロッパの人口学者が世帯動態のモデル化というテーマに結集してとり組んだ成果であり、世帯の計量人口学(household demometrics)の最先端を示すものになっている。

全体は5部17章で構成されている。第I部は準備作業で、序論である第1章に続き、第2章と第3章ではJ.SchmidとJ.Ermischがそれぞれ社会学と経済学の立場から、世帯概念の定義に含まれる諸問題を扱っている。

第II部は資料と趨勢に関するもので、F.Klijzingによる第4章はオランダのORIN調査(1984年)、M.Murphyらによる第5章はイギリスのOPCS調査(1971~81年)を紹介し、世帯の形成・解体のモデル化にはどのようなデータが必要かを論じる。第2次大戦後のヨーロッパにおける世帯の変動を扱ったK.Schwarzの第6章は、人口学を越えてさまざまな分野の研究者や実務家に有用な示唆を与えるだろう。ここでは世帯規模の縮小、世帯構造の単純化、子どもの離家率の上昇、同棲や単独世帯の増加といった趨勢が、ヨーロッパ全土にまたがる豊富なデータを駆使して描かれている。

第III部はモデル構成そのものにかかわるもので、F.Willekensによる第7章は個人のライフコースのモデル化を通じて世帯動態を捉えようとする試みである。離家・結婚・出生・死亡など、世帯構成を変えるイベントについて一定のパラメータが設定され、かなりスマートな数学的モデルが展開される。ところが年齢別イベント経験率や、経験するまでの時間の期待値、未経験者が経験するまでの待ち時間の期待値などの主要指標は、計算結果だけで計算式が示されていない。意図したわけではあるまいがこれは初等解析学のパズルになっており、結果と対照しながら用いられた式を推測するのは楽しい作業だった。W.Linkeの第8章は、世帯数の将来推計によく用いられる世帯主率法の3つのヴァリエーションを示し、結果を比較している。N.Keilmanによる第9章は、世帯動態を対象とする5つのマクロシミュレーション・モデルをレビューしたものである。他方、H.Gallerの第10章は西ドイツのマクロシミュレーション・モデルを紹介する。D.CourgeauとE.Lelièvreによる第11章は、状態間の推移率の推定問題を扱ったもので、ファジー時間の概念を導入してハザード関数を再定式化している。

第IV部はモデルの応用に関するものである。A.Kuijstenによる第12章はマクロシミュレーション・モデルを家族周期段階別分布の推計に、F.Kamarasによる第13章は世帯主率法を高年齢世帯の推計に、H.ter HeideとH.Scholtenによる第14章は第9章で紹介されたモデルを地域計画に、J.Brouwerによる第15章はマクロシミュレーション・モデルを住宅政策に、それぞれ応用している。

結論部である第V部では、世帯動態モデルを構築する際のさまざまな問題点が整理され、検討される。J.BartlemaとA.Vossenによる第16章は、行政登録システムが日常生活世界の変化に追いついていかないことを憂えているが、論点が散漫でわかりにくい。N.KeilmanとN.Keyfitzの第17章は、ずっと体系的で包括的である。ここでは世帯の定義、日常的現実における新しい趨勢、理論とモデルと推計の結合、マクロシミュレーションとマクロシミュレーションの長短、状態間の推移率の計量、分析単位としての個人と世帯、そしてデータと新しい数理的方法という7つの問題が順に論じられる。言及されている理論は家族の経済学・社会学・政治学・生物学理論からライフコース論やファジー集合論にまでおよび、方法はマルコフ過程・多相生命表・Prestonの間接推計法から最尤推定法の新しい展開までが視野に入っており、非常に刺激的である。(鈴木 透)